

情感性と記憶—アンリ現象学による試論—(2)

神谷英二

要旨 私たち人間は日々、さまざまな感情にとらわれて生きている。また私たちは、記憶から逃れることは決してできない。本研究の問いは、私がつねに情感性と記憶とともに生きているという経験を哲学はどのように記述しうるのか、情感性と記憶は互いにどのように関わっているのか、その関わりを哲学はどのように記述しうるのか、というものである。研究方法としては、ミシェル・アンリの現象学を手がかりとし、主要テキストとして、『顕現の本質』、『身体の哲学と現象学』、『精神分析の系譜』、『実質的現象学』、『受肉』を使用する。本研究は全体で3部からなり、第2部である本稿では、第1部での情感性についての探究をふまえ、記憶についての研究を行う。論述の順序としては、まずアンリの身体論を確認した上で、『身体の哲学と現象学』をもとに、記憶について論じている。さらに、『精神分析の系譜』における〈原-身体〉について考察することで、アンリの記憶論の全体像を明らかにした。

キーワード ミシェル・アンリ、記憶、情感性、習慣、原-身体、潜在力

情感性から記憶へ

本研究の問いは、私がつねに情感性と記憶とともに生きているという経験を哲学はどのように記述しうるのか、情感性と記憶は互いにどのように関わっているのか、その関わりを哲学はどのように記述しうるのか、というものである。

第1部（「情感性と記憶—アンリ現象学による試論—(1)」¹⁾では、まず情感性について『顕現の本質』、『身体の哲学と現象学』を主要テキストとして詳細に分析した。そこではまず、『顕現の本質』の記述によって、情感性に関してその概略を明らかにした上で、情感性と感覚との関係を考察した。次に『身体の哲学と現象学』を分析することにより、情感性を身体の身体性とする考えを検討した。そして、これらの成果

をふまえて、最後に情感性を主観性と同一視できるのかどうかを考察し、情感性の全体像を解明した。

それでは、アンリの現象学を手がかりに探究する時、記憶についてはどのように記述しうるのか。そして、第1部で明らかにされた情感性は、記憶といかなる関係にあるのか。これが本研究の次の課題である。

II 記憶

a. 導きの糸から記憶の素描へ

私たちがこの課題に答えようとする際に、重要な導きの糸となるのは、『身体の哲学と現象学』における、アンリの次のような分析である。

「作用を反復する力 (puissance) についてのこのような感情は、想起に内在し、想起の根

抛なのだが、私たちはこの感情に、その真の名を与えることができる。それは私たちの主観的身体の根源的存在についての超越論的内的経験なのである。私たちの身体の統一性とは、産出し反復するこの力が私たちの具体的生のすべての様態に内在しているという感情であり、この存在論的力能 (pouvoir) についての直接経験である。」(PP, 138)

これは、メヌ・ド・ピランが『心理学の基礎ならびに自然研究とその関係についての試論』において、「ある作用についての想起は、その作用を反復する力についての感情を含んでいる」(Maine de Biran 1932: 605 note) と述べていることをふまえたものである。

また、これと並んで、次の分析も重要な導きの糸となるだろう。「その根源的な存在においては、私たちの身体は時間を免れる。絶対的主観性とまったく同様、私たちの身体は、時間を構成するという関係よりほかに、時間との関係をもたないのである。それゆえ私たちの根源的存在の統一性、身体の統一性、あるいはエゴの統一性を、記憶に依拠させようなどと思ってはならない。」(PP, 138) そして、「時間を通して記憶が構成する私の存在の統一性は、ひとつの根拠を要求する。その根拠とは、習慣である。」(ibid.) あるいは、それは「私の身体が存在そのもの」(ibid.) であり、これが想起という作用を可能にするのである。²⁾

したがって、アンリによれば、「私の身体が存在そのもの」である「習慣」が「記憶の根拠」であり (PP, 137)、私たちの身体はすべての習慣の総体であり、私たちの身体の根源的な記憶は習慣であるということになる (PP, 140)。

なぜこのような主張が可能となるのだろうか。具体的な探究を開始することにしよう。

b. 身体と記憶

本研究におけるこれまでの分析からもわかるように、上記で素描したアンリの記憶論を厳密に考察するには、彼の身体についての理解を精査することが不可欠である。まず、この問題を整理することにしよう。

アンリは、『身体の哲学と現象学』再版にあたって1987年に付された「第2版への緒言」において、身体について次のように述べている。

「身体性とは、ひとつの直接的パトスであり、これは私たちの身体が世界に現われる前に、私たちの身体をすっかり規定している。私たちの身体は、自分の根本的な能力を、ひとつの力であり行動する能力、さまざまなハビトゥスを受け入れる能力、思い出す能力を、あらゆる表象とは無関係に、この根源的身体性から獲得するのである。」(PP, avertissement à la seconde édition)

また、『身体の哲学と現象学』第3章のなかでは、次のようにも述べている。

「私たちの身体は、ひとつの超越論的内的経験である限りで、自己についてのひとつの直接的知である。」(PP, 128) 私たちの身体についての直接経験は、身体はまずひとつの存在であり、それからそのあとでこの身体を経験するというのではない。そして、ここで問題となる身体は、私たちが、物体と同様に延長するものとして手で触れることが可能であるような、超越的身体なのではない。それは、根源的身体 (corps originaire) である。

そして、この身体の現われは、現われではあっても、超越的对象の現われとは異なり、あらゆる現象学的隔たりが不在であるような現われなのである。また、こうした身体はひとつの力能であり、これは「自己についてのひとつの

直接的知であり、存在の真理の地平がすでに私たちに開かれていることを前提せず、反対にこのような真理の根拠にして根源であるような、ひとつの知である。」(PP, 128-129) このようにして、身体は、根源的身体として、自己についての直接的知であることが明らかとなる。

しかしながら、アンリはさらに、「私たちの身体は、ひとつの超越論的内的経験であると同時に、ひとつの超越的経験である」(PP, 129)とも述べる。身体が超越論的内的経験であるとともに、超越的経験でもあるという、この一見矛盾するように思われる事態を私たちはいかに理解すべきであろうか。

根源的身体の自己知は、何かを対象として措定する、主題的な知ではなく、身体の自己性(ipséité)は、この知に含まれる一項目なのではなく、この知の条件である。したがって、根源的身体の自己知は、自己知でありながら、自己に閉じこめられてはいないのであり、自己を対象とするという意味での「自己についての」知ではなく、超越的存在一般を対象とする、超越的存在一般についての知なのである。

アンリは、根源的身体において、絶対的主観性を見出ししている。絶対的主観性はそれ自身は決して構成されることのない、構成する力能である。これは自らをそれ自身に与えるのであり、いかなる時も超越的存在となることはなく、自らが超越的な対象となることは絶対にならないのである。

そして、こうした分析をもとに、「身体による世界認識³⁾と自己による根源的な身体認識は、二つの異なった認識なのではない」(PP, 130)と主張される。ここで問題とされる根源的認識とは、そのなかで世界の存在も身体も私に現前する経験なのである。もちろん、

この二つの現前は、根本的に異なった仕方では現前する。すなわち、身体は、絶対的主観性の絶対的内在において私に現前し、世界は超越的存在の要素において現前するのである。しかし、あくまでも身体による世界認識と自己による根源的な身体認識は同一の経験なのであり、「私たちの身体は、ひとつの超越論的内的経験であると同時に、ひとつの超越的経験である」(PP, 129)と云うことになる。

そして、本研究第1部で明らかにしたように、こうした「超越論的内的経験」である「直接的パトス」、あるいは「直接的知」とは、自己一触発の本質としての情感性のことである。すなわち、自己性の本質とされる情感性は、同時に身体的身體性でもあるということになるのである。

c. 記憶の探究

それでは、そもそもアンリは、記憶をどのようなものと記述しているのだろうか。ここからさらに議論を深化させていくことにしよう。

この問いに答えるために、アンリは、タバコを吸う前にポケットのなかのマッチ箱をとるという行為を例に出し、反復される行為について考察している。彼は、メヌ・ド・ピランの『心理学の基礎ならびに自然研究とその関係についての試論』における議論をふまえ、こうした手が固体をつかむという場面に注目し、考察を展開する。

メヌ・ド・ピランは、次のように述べている。「手が行使したすべての運動、手が固体に触れまわることによってとったすべての位置は、この固体が不在でも、意志的に反復される。」(Maine de Biran 1932: 408) 一般的な理解とは異なり、ある運動の反復には、対象とな

る固体の存在は、必要不可欠な要素なのではない。そして、これらの運動は、「第一次性質に関わるさまざまな基礎的知覚の記号である。それゆえこれらの運動は、こうした知覚についての観念を喚起するのに役立ちうるであろう。そして、このような喚起は、意のままになる記号を手段として行使されるなら、本来の意味での記憶を構成する。それゆえ触覚的形態についての真の記憶が存在することになる。」(ibid.)

このメヌ・ド・ピランによる記述を詳細に分析するには、まず最初に、ここで問われている、固体を把握する運動の再生という現象において、次の4つの認識を区別しなければならない。

- (1) 運動のそれ自身による根源的な認識。
- (2) すでに遂行された運動と同じものとしてのこの運動の再認。
- (3) 運動の超越的項すなわち固体の認識。
- (4) すでに同じ運動によって到達された項としてのこの超越的項の再認。(PP, 132)

この4つの認識様態は、さしあたりは二つの様態に整理できる。「運動についての認識と再認」と「運動の向かう項としての固体の認識と再認」である。

まず、後者の「運動の向かう項としての固体の認識と再認」について探究することしよう。アンリによれば、そもそもあらゆる事物は、「一度限りでなければならない」という性格において、身体に現前しているのではない。それとは反対に、事物はいつも二度見られるであろうものとして私たちに与えられているのである。この「事物はいつも二度見られるであろうものとして私たちに与えられている」という与えられ方は、「一般的意義 (signification générale)」を有していると規定される。

そして、アンリは次のように説明する。「対象の存在は、ある何らかの運動という条件のもとに私が達しうるものである。この運動は他方、私の身体の固有の、還元不可能な、侵すべからざる、要するに存在論的な可能性なのだから、世界の存在は私がいつでも達しうるものであり、原理上私に近づけるものである、ということが帰結する。ある対象が私の身体に与えられるたびごとに、その対象は私の身体に、現前する経験の対象としてというよりも、私の身体が達しうる何かとして、身体がもつそれへの力能に従属する何かとして与えられる。」(PP, 133)⁴⁾

もちろん、私たちは二度と見ることはないであろう風景や他人の表情などに会うことがある。しかしながら、この「二度と見ることはない」という規定は、先述した「事物はいつも二度見られるであろうものとして私たちに与えられている」という与えられ方が有する一般的意義を排除しない。この規定は、この一般的意義を根拠とした、この一般的意義がもつ消極的な規定のひとつでしかないのである。すなわち、「一回限り」という与えられ方は、あくまでも「繰り返し」という与えられ方を基盤にしているということになる。

そして、こうした指摘は、身体がもつ力能の消失や死の観念によって表象される力能の全体的な消失についても同様に妥当するものである。死の観念によって表象される力能の全体的な消失さえも、私たちの世界経験の一般的意義の一規定でしかないのである。

世界とは、私の身体的全経験の内容全体であり、それは実在的、または可能的な、私の全運動の項なのである。すなわち、「(3) 運動の超越的項すなわち固体の認識」と「(4) すでに同

じ運動によって到達された項としてのこの超越的項の再認」の結びつきは、運動の対象となる項が世界の場合も同様に妥当するものなのである。

以上の探究によって、固体と世界の与えられ方の反復可能性が示されたことにより、「運動の向かう項としての固体の認識と再認」は実は一体化した事態であることが明らかとなった。そして、こうした固体と世界の与えられ方の反復可能性は、実は運動と身体の反復可能性に根拠をもつ。

ここで問われている、私の運動の存在は、私の身体の、現在における経験的な一状態のようなものではなく、「存在論的認識の存在そのもの」である。したがって、この運動の項は、一定の制限があるものではなく、際限なく呼び起こすことができるものであり、その内容は、原理上つねに私に近づきうるのである。身体は、ひとつの力能であり、身体の認識は、特定の瞬間に限定されているのではない。それは、認識一般の可能性であり、ある世界が私に与えられている実在的で具体的な可能性であるということは、「運動の根源的存在と、存在論的認識それ自身の存在との同一性」を意味している。

アンリは、こうした議論をふまえて、「存在論的可能性の実在的で具体的な存在」を「習慣」と定義する。したがって、身体は習慣であり、私たちの習慣の総体である。つまり、身体の運動は、「一回限り」という仕方であるのではなく、身体は習慣の総体なのだから、あくまでも「繰り返し」というあり方が基盤になっている。こうして、「運動についての認識と再認」もまた、一体化した事態であることがわかる。

それでは、「運動の向かう項としての固体の認識と再認」と「運動についての認識と再認」

は、どのように関わっているのだろうか。

この問いに答えるためには、世界へと視点を転換して、さらに習慣について考察することが必要になる。これまでの議論をふまえると、世界は私たちのすべての習慣の項であるということになる。そして、この意味において、私たちは真に、「世界の住人 (habitants)」(PP, 134) なのである。住まうこと (habiter)、世界に通うこと (fréquenter le monde)⁵⁾こそが、人間の実在 (réalité humaine) の事実である。

アンリは、この論点について次のように述べている。

「もしいま私たちが、私たちの議論しているピランの実例に戻り、この実例のうちに含まれている4つの基本的な認識に戻るならば、私たちには、なぜ実際には認識と再認とを区別する必要がないのかがわかる。あらゆる認識が再認でもあるとすれば、それは認識が孤立した一作用の事柄ではなくて、主観性それ自身の、すなわちひとつの力能の事柄だからである。あるいはこう言ったほうがよければ、それは経験的認識ではなくて、ひとつの存在論的認識だからである。」(PP,134)

経験的認識ではなくて、ひとつの存在論的認識であるとは一体いかなることであろうか。固体について私がつ認識において、固体が現前しているものは、私の手である。この認識は、つかむという単独の行為ではなくて、把握の一般的可能性である。この可能性はその存在論的現在において、この固体および世界のすべての固体一般の、過去および将来のすべての把握をもうちに担っている。したがって、マッチ箱を手でつかむ場合、マッチ箱を運動の目標として特定して、その行為を行うのではなく、把握という行為の一般的可能性のうちに、マッチ箱と

いう固体や世界に含まれる、あらゆる固体が予め含まれているのである (cf. 庭田2001: 187)。そして、ある固体を把握するという行為は、「本質上、私に提示される永続的な可能性であり、過去・現在・未来を支配する力能である。」(PP, 136) アンリは、この力能のこうした存在論的構造を習慣と定義しているのである。

ここから、「運動の向かう項としての固体の認識と再認」と「運動についての認識と再認」は、一体であることが帰結する。これらは実は唯一の認識の二つの様態に過ぎないことが明らかとなる。したがって、実際の経験には、4つの認識ではなく、マッチ箱をつかむという運動とその反復可能性のみがあるということになる。

以上の分析から、身体が「直接的知」であり、力能であり、習慣であることがわかる。アンリは、この身体の知を「記憶」と呼ぶのである。

「思い出す身体は、身体を事物へと導いた最初のさまざまな歩みからは切り離されず、それはそれを取り巻くあらゆる対象への接近の秘密を自らのうちに含んでおり、それは宇宙の鍵であり、存在するすべてのものにその力能を広げる。身体の射程外、身体の手出しの外にとどまるものが、身体に拒まれるというこのような意義を得るのは、世界への接近および世界への開けという、いっそう原初的な力能の内部においてのみである。」(PP, 135)

したがって、最初の運動が決定的に重要なのであり、すべてはその内部において、その根源的な反復可能性としての記憶において生じているのである。

こうして、アンリによる記憶についての基本的な理解が明らかとなった。

d. 記憶の根拠としての習慣

これまでの探究によれば、身体は習慣であるとともに、記憶でもあることになる (cf. PP, 135)。それでは、習慣は記憶とどのように関わっているのだろうか。すでに言及したように、アンリは、「私の身体の存在そのもの」である「習慣」が「記憶の根拠」であると述べていた (PP, 137)。どうしてこのように主張するのだろうか。ここで必要な限りで簡潔に整理しておこう。

アンリはここでもまた、固体をつかむという例を用いて考察を進める。先に分析した習慣についての理論は、運動による固体の認識という認識を、自らのうちに再認を担っているものとして解明していた。そして、この再認は、いつでも思惟の明示的主題となりうる。そのときひとつの新しい志向性が生じ、その志向性においては、固体の再認が明示的思惟の主題となり、固体はすでに認識されたものとして再認される。あるいはさらにまた、固体を把握する運動が、すでに産出された運動として明示的に主題化される。「そのとき私は、第一のケースでは固体についての想起をもち、第二のケースではかつて私がこの固体についてもった認識についての想起、過去において私によって遂行された把握する運動についての想起をもつ。」(PP, 137)

したがって、周知のように、ジョン・ロックが『人間知性論』において、私たちの同一性は、私たちの多様な、または継起的なあり方についての記憶ないしは想起に基づいていると考える (Locke 1975)⁶⁾ のとは対照的に、アンリの考えでは、習慣こそが記憶の根拠なのである。

アンリは次のように結論づける。「習慣が身体の存在論的構造を定義するのだから、身体の

存在のうちに私たちの記憶作用や喚起作用の原理を見るのは正しい。」そして、「主観的身体の根源的存在が存在論的認識の実在的存在であり、認識一般の可能性、その不在における世界についての知だからこそ、主観的身体の根源的存在はまた、そしてこの理由ゆえに、世界についての知であり、世界の形式についての記憶」なのである (PP, 137-138)。

e. 潜在力

アンリは、記憶について、『身体哲学と現象学』だけではなく、『精神分析の系譜』の最終章にあたる「潜在力 (Potentialité)」においても、多くの重要な考察を行っている。ここからは、このテキストを手がかりに、記憶の分析をさらに進めていくことにする。

「潜在力」の章では、アンリ独自のデカルト理解とフロイトによるデカルト批判を展開する途上で、記憶への探究がなされている。デカルトは、魂を無や空虚な形式ではなく、「生の無限の豊かさと同様性」(GP, 387) として考えていたとアンリは解釈している。それに対して、フロイトは、デカルトの魂の場所と地位に、無意識をおいたとされる。⁷⁾

アンリのデカルト解釈では、魂のなかにあるものは、表象的内容を産出する能力である。それではいかにして、私たちはこの能力を把握することができるのだろうか。アンリの考えでは、「観念の対象的実在性からそれを産出する力 (puissance) への移行」(GP, 391) を可能とするのは、唯一、実質的現象学だけである。この移行が、私たちを導いて、現象性の脱立的次元 (dimension extatique) とそれに原理的に属している有限性から、「自己自身を感得すること (s'éprouver soi-même)」(ibid.) で

存立しているものへと連れて行くのである。この「自己自身を感得すること」で存立しているものとは、生を生としている本源的思われ (semblance) のことである。そして、この産出する力、力能は、「世界の手前に、見えないもののなかに、絶対的主観性の根元的な内在のうちに」(GP, 392) ある。

こうした議論をふまえ、想起と記憶について、次のように述べられる。

「想起することの可能性とは、〈潜在力〉⁸⁾ そのもののことに他ならない。」(GP, 397)

これは、「私たちの本源的で固有の存在」(ibid.)、「実在性を構成している存在論的可能性」(GP, 395) のことである。そして、「並置されたもの (le juxta-posé) やまき散らされたものに、記憶は一種の予定調和によって合致し、記憶は我惟う (je pense) として、私たちのあらゆる表象に伴い、それらを次々と無ではない、無意識の潜在性から引き出し、それらに現象学的顕在性において存在を授ける。」(ibid.) このように、記憶の働きについて語られる。しかし、この記憶の可能性こそが問題なのであり、この記憶が最終的に憩っている力こそが問題である。

そして、この記憶の可能性と原理について、『精神分析の系譜』では、次のように述べられている。「記憶の原理は、表象ではなく、〈原-身体〉である。また、この〈原-身体〉において、超力 (hyperpuissance) は実効的であり、表象的記憶もまた、それがまずひとつの力能である限りで、〈原-身体〉に属している。」(GP, 398)

ここで、記憶の問題は、〈原-身体〉(Archi-Corps)⁹⁾ の問題と結びつくことになる。

f. 原-身体と記憶の根拠への問い

それでは、ここからさらに『精神分析の系譜』で語られる〈原-身体〉について分析を展開しよう。この概念は、『身体の哲学と現象学』では、「根源的身体」として言及されていたが、必ずしも主題的には探究されないままになっていた。しかしながら、これは、アンリ哲学において、記憶の根拠について考えようとする時、決して避けて通ることのできない、重要な概念である。

アンリは、〈原-身体〉について、次のように述べる。

「本源的身体 (corps originel)、〈原-身体〉というものが存在する。そこにはこのような超力が宿り、そこでその超力は自分の本質を自己同一的なものとして展開している。身体は眼や耳や手をもつが、〈原-身体〉は眼も耳も手もたない。しかしながら、ただその〈原-身体〉によってのみ、眼や手、すなわち、見たり、つかんだりする原理的可能性が私たちに与えられる—まさしく私たちがそうであるところのものとして、私たちの身体として。したがって、現実には私たちはいつでも、少しばかり、私たちがそうであるところのもの以上のものであり、私たちの身体以上のものである。」(GP, 396)

この「より以上のもの (plus)」とはどういうことだろうか。ここで、〈原-身体〉とニーチェの〈力への意志〉が結びつけられることになる。

「実質的現象学は、ニーチェが〈力への意志〉と考えたあの「より以上」、そしてまた〈生〉の超力でもあるあの「より以上」についての根元的理論である。〈力への意志〉とは、そこで私たちの身体が生きるものすべてや生それ自体と同じように、最初に自己へと到るような〈原-

身体〉なのである。」(ibid.)したがって、〈原-身体〉の存在は、「力の本質からしか理解されない」(GP, 393)ということになる。

そして、「力の現象学的規定を、〈潜在力〉を、もはや世界の〈脱-自 (Ek-stase)〉として理解することも、またそれをもとにして理解することもできない」(GP, 396)と考えられている。

私たちの身体は、私たちが世界に対してもつ力能の総体である。身体には、眼や耳や足や手がある。本源的な超力によって私たちはこれらの力能の各々を把握し、それらを働かせているのであり、デカルトも指摘したように、超力によって、そうしたい時に、自分のために力能を使うことができる。この超力は、自分のうちにこれらの力能のいかなるものも持ち合わせてはおらず、それらの媒介によっては遂行されない。「超力にはそれらの力能は必要ではないが、力能のほうは超力を必要とする。」(ibid.)

このテキストを正確に理解するには、二つの「力」の区別が重要である。つまり、身体の力能としての力と、アンリの言う「超力」としての力との区別である。前者は、たとえ運動的、感覚的能力と表現されようが、本質的な意味での運動でも力でもない。力および運動ということでは考えなければならないのは、むしろ「超力」としての身体の力である。

こうして、器官を伴った、さまざまな力能の体系である身体は、〈原-身体〉において、超力により、機能することが可能となっていることがわかる。

それでは、こうした〈原-身体〉は、身体の知である記憶とどのように関わっているのだろうか。先にも言及したように、『精神分析の系譜』では、次のように述べられていた。「記憶の原理は、表象ではなく、〈原-身体〉である。

また、この〈原-身体〉において、超力の実効的であり、表象的記憶もまた、それがまずひとつの力能である限りで、〈原-身体〉に属している。」(GP, 398) これはどのように解釈すべきなのだろうか。

アンリの考えでは、記憶もまた、身体を構成するひとつの力能である。したがって、他のさまざまな力能と同様に、〈原-身体〉に属しているとされる。そして、記憶を可能にしているものは、超力としての力である。

アンリによれば、〈原-身体〉の自己自身への直接的到来、その直接的覚知としての〈原-開示〉(Archi-Révélation)こそが、再認と記憶の可能性の原理なのである。アンリは、『精神分析の系譜』の最後で次のように述べている。

私たちの存在の結集 (rassemblement) は、「本源的な内的〈結集〉であり、そこにあらゆる力の本質と記憶そのものが住まっている。」(GP, 398) そして、さらにそこには「〈原-身体〉の〈原-開示〉」と「存在の自己との永遠の抱擁とそのパトス」(*ibid.*) が住まっているのである。

以上のまとめからわかるように、『精神分析の系譜』での〈原-身体〉と記憶についての記述は、すでに『身体哲学と現象学』において、身体と記憶について説明されていたことを、ニーチェの〈力への意志〉をふまえて、表現し直したものであると言える。しかし、これは約20年を経ての単なる繰り返しなのではない。ここには新たに、〈原-身体〉を身体力能とは質的に異なる超力によって理解する考えが登場している。そしてそれ以上に重要なのが、〈原-身体〉の直接的覚知としての〈原-開示〉についての言及である。この〈原-開示〉という概

念は、本研究にとってもやがて大きな役割を果たすことになるのである。

むすび

本稿の冒頭でも言及したように、メーヌ・ド・ビランが、「ある作用についての想起は、その作用を反復する力についての感情を含んでいる」(Maine de Biran 1932: 605 note) と考えたのをふまえて、アンリは、次のように述べていた。

「作用を反復する力についてのこのような感情は、想起に内在し、想起の根拠なのだが、私たちはこの感情に、その真の名を与えることができる。それは私たちの主観的身体の根源的存在についての超越論的内的経験なのである。私たちの身体統一性とは、産出し反復するこの力が私たちの具体的生のすべての様態に内在しているという感情であり、この存在論的力能についての直接経験である。」(PP, 138)

ここには、想起や記憶と密接に結びついた感情に関する考察の萌芽が含まれている。

また、アンリは、『精神分析の系譜』の「VII ニーチェによる生と情感性」のなかでは、ニーチェの『道徳の系譜』に言及して、「記憶への意志としてのあらゆる記憶化能力は、情感性に依拠しており、明らかに情感性のうちに根づいている」(GP, 260) と述べている。この記憶への意志は、表象的能力としての単なる記憶とは異なり、生それ自身から生じるものであり、生の最も内奥の可能性を指示している。

ここで記述されている事態をさらにアンリ哲学の全体と結びつけて、論述すること。これが本研究の最後の課題である。それでは、この課題を探究するには、どのような導きの糸がある

のだろうか。

アンリは、『身体の哲学と現象学』の「序論」において、エゴの存在の解明においては、身体存在論的分析が不可欠であることを説明する過程で、エゴにとっての情感性の問題が実は、「受肉 (incarnation)」の問題に関わるものであることを示唆していた。

アンリによれば、人間はそれ自身、弁証法的な構造のひとつである。そして、この構造は、精神と身体を関係づける限りで、あらゆる構造のなかで最も弁証法的なものである。この構造は、根本的な、ひとつの逆説である。そして、この逆説は真に根拠の役割を果たしている。「悲劇的なもの、滑稽、身体をもっているという感情、露出趣味や臆病、また他の多くの実存的ないし情感的な規定は、人間本性に生じはするが人間本性から出発しては説明できないような、そのような感情や態度ではない。」(PP, 3) それとは逆に、人間存在は、「人間がある感情を容れうるためには、何であらねばならないか」というような問いのなかに含まれている要請から出発して、規定されなければならないのである。

なぜ、このように言うことができるのだろうか。アンリによれば、「このような感情のもとには、人間の個体的ないし集団的な歴史が通過するさまざまな情感的にして実存的な様態を規定する、あるひとつのもっと深い調性 (tonalité) が広がっているから」(PP, 4) である。

もしそうであれば、この基本調性は、意識と身体との弁証法的合一の契機そのものとして理解されなければならないであろう。実存の結び目であり、実存のさまざまな態度が根差す根源でもある、上記の逆説は、ついには、「受

肉という中心現象がどうしてもよかったり、限りなく隠されていたりしたままではありえないような、そのような哲学的反省によって、多少とも明断に気づかれなければならないのであ

る。」(ibid.) そして、フッサールをはじめとする多くの現象学者たちが中心的に考察してきた、超越論的自我や意識や純粹主観性などではなく、「人間の受肉した存在こそが、そこから出発しなければならないように思える根源的事実なのである」(ibid.) と述べられる。

このようにして、情感性と記憶について探究してきた本研究は、最後に、「受肉」を巡る問題群へと導かれることになるのである。

(以下、「情感性と記憶—アンリ現象学による試論—(3)」に続く。)

凡例

(1) ミシェル・アンリの著作については、次のように略号によって示す。

Henry, M. : *Généalogie de la psychanalyse, Le commencement perdu*, P.U.F., 1985.=GP

— : *L'essence de la manifestation*, 2^e éd., P.U.F., 1990.=EM

— : *Phénoménologie matérielle*, P.U.F., 1990.=PM

— : *Philosophie et phénoménologie du corps, Essai sur l'ontologie biranienne*, 4^e éd., P.U.F., 2001.=PP

— : *Incarnation, Une philosophie de la chair, Seuil*, 2000.=IN

(2) フッサールのテキストのうち、『フッセリアーナ』(Husserliana/ Edmund Husserl Gesammelte Werke) からの引用箇所の指示は、略号Huaの後に巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示す。

註

1) 神谷英二 (2005) : 「情感性と記憶—アンリ現象

学による試論一(1)、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第14巻第1号、福岡県立大学人間社会学部、pp. 21-36

2) アンリは、記憶によってエゴや身体の一貫性や同一性を説明することを厳しく拒否している。メーヌ・ド・ピランは、エゴの一貫性を記憶や想起に求めようとする考えをロックに帰属させ、厳しく批判しており、アンリもこれを支持している。メーヌ・ド・ピランによれば、人格の同一性が、記憶の基盤なのだから、ロックが、私たちの同一性は私たちの多様な、または継起的なあり方についての記憶ないしは想起に基づいていると言う時、ロックは真の悪循環に陥っているのである。(PP, 139) , (Maine de Biran 1932: 322)

3) ここで述べられる「身体による世界認識」は、実は、知性的でもなく、表象的でもない。これは十分に注意すべきことである。認識とは理性による把握のことであると短絡的に考えてはならない。ここには私が遂行する運動の精確な応答がある。ここで問題となる認識の対象は、観想された対象ではなく、運動の対象である。ポケットのなかにあるマッチ箱をとるという行為の例では、私とその箱についても認識とは、箱をつかみ、箱を利用する運動がこの箱についても認識のことであり、これはひとつの過程であると言える。(PP, 130)

そして、私たちの身体が認識する世界の本性を理解するためには、私たちは自己の身体が展開している力能の内部に身を置かなければならない。したがって、身体的認識は原始的 (primitiv) ではあるが、知的人間にすぐ超出されてしまうような、暫定的な認識なのではない。そうではなく、反対に、身体的認識は原初的で (primordial) 還元不可能な、存在論的認識なのである。すなわち、身体的認識は、知性的・理論的認識を含む、私たちのすべての認識の根拠であると同時に土壌でもあるのである。(PP, 131)

4) アンリのテキストからの引用における傍点は、アンリ自身による強調であり、原文ではイタリックである。以下、同じ。

5) 「世界に通うこと (fréquenter le monde)」とは、世界と親しく交際し、頻繁に訪れるということを含意した表現である。

6) 特に第2巻第27章「同一性と差異性について」を参照。

7) 現象学が、フロイトをはじめとする精神分析が明らかにした「無意識」をどのように扱おうのかは、いまもなお、大きな研究課題である。フッサールは、『内的時間意識の現象学』に収められている、附論IX「原意識と反省の可能性」(Hua X, 118-120)において、志向的意識の究極の層である、原意識が無意識であることを否定している。「後になってはじめて意識されるような『無意識的』内容について語るのには、ばかっている。意識はそれぞれの位相において必然的に意識である。過去把持的位相が先立つ位相を対象化することなく、意識しているように、すでに原与件も、しかも『今』という固有の形式で、対象化されることなく意識されている。」(Hua X, 119) (傍点による強調は、フッサール自身による。原文ではゲシュペルト。)

このフッサールの分析については、『声と現象』においてデリダも言及している (Derrida 1967: 71)。

また、現在活躍中の現象学者によるフロイトの無意識概念についての研究としては、ベルネの研究 (Bernet 1997) が重要である。これは、フロイトとフッサールの「衝動 (欲動)」概念を手がかりにフロイトの無意識とフッサールの想像意識を統合的に解釈しようとする研究である。

8) 〈潜在力〉のように、〈 〉を付けた場合は、アンリの原文では、単語の最初が大文字であることを示す。

9) 「原-身体」とフッサールの「キネステーゼ」・「原キネステーゼ」を統一的に理解することは、情感性

との関わりで身体を論じようとする時、重要な課題となる。フッサールは1931年に書いたある草稿のなかで次のように書いている。「私は次のことをよく考えてみる。すなわち、遡行的に問う時、最終的に、原キネステーズ、原感情、原本能を伴う原ヒュレーの変化のなかで、原構造が明らかになる、ということ。それによれば、事実のなかには次のことが含まれていることになる。原質料は、ある統一形式のなかでまさにそのように経過するのであり、そして、この統一形式とは世界性に先立つ本質形式だということが含まれている。」(Hua X V, 385) フッサールの「原キネステーズ」については、私はかつて詳しく論じたことがある(神谷 2006)。

参考文献(アンリ、フッサールの著作を除く)

- Baertschi, B. (1982) : *L'ontologie de Maine de Biran*, Éditions Universitaires Fribourg Suisse.
- Bergson, H. (1985) : *Matière et mémoire*, Quadrige, 94^eéd., P.U.F.
- Bernet, R. (1997) : Husserls Begriff des Phantasiebewußtseins als Fundierung von Freuds Begriff des Unbewußten, in: Ch. Jamme (hrsg.), *Grundlinien der Vernunftkritik*, Suhrkamp.
- Depraz, N. (1994) : Temporalité et affection dans les manuscrits tardifs sur la temporalité (1929-1935) de Husserl, in: *Alter:Revue de Phénoménologie* No.2, Éditions Alter.
- (1998) : Can I Anticipate Myself? Self-Affection and Temporality, in: D. Zahavi (ed.) : *Self-awareness, Temporality, and Alterity. Central Topics in Phenomenology*, Kluwer Academic Publishers.
- (2000) : Hyletic and Kinetic Facticity of the Absolute Flow and World Creation, in: J. B. Brough and L. Embree (eds.) : *The Many Faces of Time*, Kluwer Academic Publishers.
- Derrida, J. (1967) : *La voix et le phénomène*, P.U.F.
- Dufour-Kowalska, G. (1980) : *Michel Henry, Une philosophie de la vie et de la praxis*, J. Vrin.
- Franck, D. (1981) : *Chair et corps, sur la phénoménologie de Husserl*, Minuit.
- Janicaud, D. (1991) : *Le tournant théologique de la phénoménologie française*, Éditions de l'Éclat.
- Kühn, R. (1992) : *Leiblichkeit als Lebendigkeit. Michel Henrys Lebensphänomenologie absoluter Subjektivität als Affektivität*, Alber.
- (1998) : *Husserls Begriff der Passivität. Zur Kritik der passiven Synthesis in der Genetischen Phänomenologie*, Alber.
- Landgrebe, L. (1968) : Die Phänomenologie der Leiblichkeit und das Problem der Materie, in: *Phänomenologie und Geschichte*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- (1982) : *Faktizität und Individuation*, Felix Meiner.
- Laoureux, S. (1999) : De l'auto-affection à l'auto-affection. Remarques sur l'expérience d'autrui dans la phénoménologie de Michel Henry, in: *Alter:Revue de Phénoménologie* No.7, Éditions Alter.
- Lee, N.-I. (1993) : *Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte*, Kluwer Academic Publishers.
- Locke, J. (1975) : *An Essay concerning Human Understanding*, P. H. Nidditch (ed.) , Oxford University Press.
- (1998) : *Identité et différence, L'Invention de la conscience*, édition bilingue (anglais- français) , É. Balibar (éd.), Seuil.
- Maine de Biran (1924) : *Mémoire sur la décomposition de la pensée, Œuvres de Maine de*

- Biran, P. Tisserand (éd.), t. III et IV, Alcan.
- (1932) : *Essai sur les fondements de la psychologie et sur ses rapports avec l'étude de la nature*, *Œuvres de Maine de Biran*, P. Tisserand (éd.), t. VIII et IX, Alcan.
- Ni, L. (1998) : *Urbewußtsein und Reflexion bei Husserl*, *Husserl Studies* 15, Springer.
- Nietzsche, F. (1999) : *Jenseits von Gut und Bose, Zur Genealogie der Moral, Sämtliche Werke* Bd.5, G. Colli und M. Montinari (hrsg.), Neuausgabe. Deutscher Taschenbuch Verlag/ W. de Gruyter.
- Ricoeur, P. (2000) : *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Seuil.
- Romeyer-Dherbey, G. (1974) : *Maine de Biran, ou, Le penseur de l'immanence radicale*, Seghers.
- Sartre, J.-P. (1939) : *Esquisse d'une théorie des émotions*, Hermann.
- (1940) : *L'imaginaire, psychologie phénoménologique de l'imagination*, Gallimard.
- Sepp, H. R. (2002) : *Der phänomenologische Ursprung des Absoluten bei Husserl und Michel Henry*, in: R. Kühn und S. Nowonty (hrsg.): *Michel Henry, Zur Selbsterprobung des Lebens und der Kultur*, Alber.
- Yamagata, Y. (1991) : *Une autre lecture de L'Essence de la Manifestation: Immanence, présent vivant et altérité*, in: *Les Études philosophiques*, No.2. avril-juin, 1991, P.U.F.
- (1998) : *The Self or the Cogito in Kinaesthesia*, in: D. Zahavi (ed.) : *Self-awareness, Temporality, and Alterity. Central Topics in Phenomenology*, Kluwer Academic Publishers.
- (2001) : *L'immanence et le mouvement subjectif*, in: A. David et J. Greisch (sous la direction de) : *Michel Henry, L'épreuve de la vie*, Les Éditions du Cerf.
- Yamaguchi, I. (1982) : *Passive Synthesis and Intersubjectivität bei Edmund Husserl*, Martinus Nijhoff.
- 稲垣論 (2007) : 『衝動の現象学—フッサール現象学における衝動および感情の位置づけ—』 知泉書館
- 神谷英二 (1997) : 「自我の発生論と相互主観性—〈学の究極的基礎づけ〉のために—」 『現象学年報』 13, 日本現象学会
- (2000) : 「キネステーズとヒュレーの間—身体と自然についての現象学的研究—」, 『福岡県立大学紀要』 第8巻第2号, 福岡県立大学
- (2005) : 「情感性と記憶—アンリ現象学による試論— (1)」, 『福岡県立大学人間社会学部紀要』 第14巻第1号, 福岡県立大学人間社会学部
- (2006) : 「他者経験の起源—発生的現象学におけるヒュレー・キネステーズ・他者—」, 千田義光・久保陽一・高山守編 『講座 近・現代ドイツ哲学II』 理想社
- 北 明子 (1997) : 『メヌ・ド・ピランの世界—経験する〈私〉の哲学—』 勁草書房
- 中 敬夫 (2000) : 「解説 メヌ・ド・ピランとミシェル・アンリ」, M.アンリ (中敬夫訳) 『身体の哲学と現象学—ピラン存在論についての試論—』 法政大学出版局
- (2001) : 『メヌ・ド・ピラン—受動性の経験の現象学—』 世界思想社
- (2004) : 『自然の現象学—時間・空間の論理—』 世界思想社
- 庭田茂吉 (2001) : 『現象学と見えないもの—ミシェル・アンリの「生の哲学」のために—』 晃洋書房
- 村松正隆 (2007) : 『〈現われ〉とその秩序—メヌ・ド・ピラン研究—』 東信堂
- 山形頼洋 (1993) : 『感情の自然—内面性と外在性についての感情の現象学—』 法政大学出版局

— (2004) :『声と運動と他者—情感性と言語の問題—』

萌書房

山口一郎 (2005) :『存在から生成へ—フッサール発生の現象学研究—』、知泉書館

吉永和加 (2004) :『感情から他者へ—生の現象学による共同体論—』 萌書房

* 本論文は、日本学術振興会・平成19年度科学研究費補助金・基盤研究 (C)、研究課題名：集合的記憶を媒介とした世代間コミュニケーションに関する現象学的研究 (研究代表者：神谷英二、課題番号：19520025) の補助による研究成果の一部である。